

**PEPNet
-Japan**

第6回 日本聴覚障害学生 高等教育支援 シンポジウム

2010. 11. 14. SUN
仙台市情報・産業プラザ ネットU



主催：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
国立大学法人 筑波技術大学

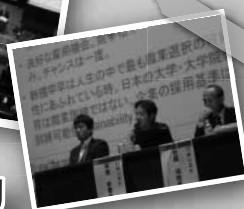
共催：国立大学法人 宮城教育大学

協力：みやぎ DSC

後援：文部科学省／独立行政法人 日本学生支援機構 (JASSO)
河北新報社／朝日新聞仙台総局／読売新聞東北総局／
毎日新聞仙台支局／NHK 仙台放送局／仙台放送／ミヤギテレビ

第6回 日本聴覚障害学生 高等教育支援 シンポジウム

2010. 11. 14. SUN
仙台市情報・産業プラザ ネットU



主催：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

国立大学法人 筑波技術大学

共催：国立大学法人 宮城教育大学

協力：みやぎ DSC

後援：文部科学省／独立行政法人 日本学生支援機構 (JASSO)

河北新報社／朝日新聞仙台総局／読売新聞東北総局／

毎日新聞仙台支局／NHK 仙台放送局／仙台放送／ミヤギテレビ

も く じ

開催事項	1
挨拶	2
プログラム	4
会場案内	6
分科会	
分科会 1 基礎講座「どうする？どうなる？－受験～入学～授業－」	8
分科会 2 「詳解！宮城教育大学－理念から日々の取り組みまで－」	1 6
分科会 3 「一緒にスキルアップ！ －ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳－」	2 3
分科会 4 「みんなで解決！現場の悩み－先輩とともに考える－」	3 0
ランチセッション	
聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト	3 6
聴覚障害学生支援に関する機器展示	3 7
全体会	
特別企画「徹底解剖！PEPNet-Japan－あなたのギモンに答えます－」	4 0
特別対談「宮城教育大学学長と語る－大学教育と障害学生支援－」	4 3
参考資料	
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）活動紹介	4 6
PEPNet-Japan 連携大学・機関の紹介	5 3
筑波技術大学の紹介	7 0
東北地区における聴覚障害学生教育支援 活動紹介	7 1
聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 発表内容紹介	7 9



開催要項

- 名 称 : 第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム開催要項
- 目 的 : 高等教育機関で学ぶ聴覚障害学生への支援については、近年多くの大学が聴覚障害学生の受講する授業に対してノートテイカーを配置するなどの体制作りを進めている。日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、筑波技術大学を中心に、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきた。
本シンポジウムでは、全国の大学における支援実践に関する情報を交換するとともに、PEPNet-Japanの活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の支援体制発展に寄与することを目的とする。
- 期 日 : 2010年11月14日（日）10:00～17:00
- 会 場 : 仙台市情報・産業プラザ ネットU（仙台市青葉区中央1丁目3番1号 AER 内）
- 主 催 : 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）
国立大学法人 筑波技術大学
- 共 催 : 国立大学法人 宮城教育大学
- 協 力 : みやぎ DSC
- 後 援 : 文部科学省
独立行政法人 日本学生支援機構（JASSO）
河北新報社/朝日新聞仙台総局/読売新聞東北総局/毎日新聞仙台支局
NHK 仙台放送局/仙台放送/ミヤギテレビ
- 大 会 長 : 高橋孝助（宮城教育大学 学長）
実行委員長 : 及川力（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター長）
事務局長 : 白澤麻弓（筑波技術大学 准教授）
実行委員 : 藤島省太・菅井裕行・松崎丈・芳賀茂・村田哲彦・
前原明日香・及川麻衣子・武山美恵子・横沢哲美（宮城教育大学）
高橋明美・田宮悠（みやぎ DSC）
石原保志・小林正幸・中嶋靖雄・三好茂樹・河野純大・長南浩人・
蓮池通子・萩原彩子・中島亜紀子・磯田恭子・石野麻衣子（筑波技術大学）



第6回シンポジウムの開催にあたって

国立大学法人 筑波技術大学長

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク 代表

村上 芳則

本学は23年前に「目や耳からの情報の取得に制限のある学生が、バリアのない教育環境で思う存分勉強し、持っている能力を開花させ、より良い社会自立をしてほしい」という多くの人々の願いの中で設立されました。以来、1344名の卒業生を社会に送り出すなど、社会参画・貢献できる人材の育成に多くの成果を上げています。

本年4月には、4年制大学としての第1期生の卒業に合わせ、大学院技術科学研究科がスタートしました。聴覚、視覚障害者のみを受け入れる大学院としては世界で初めてです。20年半前、3年制の短期大学として第1期生を受け入れ、50名の学生でスタートした本学は、総定員374名の大学として新たな1ページを開きました。

さらに、本学は第1期生の卒業に合わせた「大学院」開設に続き、学生からの要望の多い「教職課程」の開設、短期大学時代の卒業生等のための「編入学」や「学び直し」の受け入れ、そして研修生、留学生、特に韓国、中国からの「留学生」の受け入れを推進するための体制、制度の整備に取り組み、『多様な教育の需要』に応え得る大学を目指しています。

近年、聴覚、視覚障害者の大学進学が益々増加し、数多くの大学等において様々な教育環境の改善や情報保障、そして授業担当教員自らによる教育方法の工夫がなされるようになってきました。しかし、現場では様々な疑問や問題点、悩みを抱えているのが実情です。

このような状況の中で、本学の「障害者高等教育研究支援センター」の重要な機能の一つに他大学支援があります。開学以来、本学の教育・研究活動の経験及び成果を広く提供するとともに、他大学等における障害者の教育環境の改善に関して支援を行ってきました。今年、教育関係共同利用拠点(障害者高等教育拠点)として文部科学大臣の認定を受けました。今回の認定により、本学と聴覚・視覚障害学生が在籍する他の高等教育機関との連携をさらに発展させ、障害学生に対する学修支援の一層の充実を図るとともに、将来的には、この支援センターが担う大学院の専攻を設置し、障害者への教育方法や情報保障方法・機器などについての専門家を育成したいと考えています。

また、本学は、「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)」の中で、独立行政法人日本学生支援機構と手を携え、障害学生の支援活動を行っています。同時に、アメリカ、中国、韓国、ロシアなどの障害者のための大学等、そして宮城教育大学と連携協定を結び、その中で連携を深め、重要な役割を果たしています。

聴覚、視覚障害者のみを対象とする本学が86の国立大学法人の中で大学院のある大学として位置づくこと、また「PEPNet-Japan」が全国規模で機能することは、我が国の障害者の高等教育の在り方、障害のある人々のより良い社会自立の実現に大きな影響を与えることでしょう。その中で、「第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」が開催されますことは、大変意義深いことであり、参加された皆様にとって有意義な1日となりますことを心から祈念します。



第6回シンポジウムの開催にあたって

国立大学法人 宮城教育大学長

第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム大会長

高橋 孝助

筑波技術大学は、昭和62（1987）年の設置以来、わが国唯一の聴覚や視覚に障害のある学生のための短期大学として、さらには平成16（2004）年からは4年制大学として、多くの優れた人材を育成し世に送り出してきたことは皆様ご承知のことと存じます。また、『多様な教育の需要』に応えるため、今年度より大学院が設置され、「教職課程」の開設、卒業生等のための「編入学」や「学び直し」の受け入れ、そして研修生、留学生の受け入れを推進するための体制、制度の整備など様々な取り組みを行っているという意味でも、まさに先駆的役割を担った大学であるということはいまでもありません。

ことに、筑波技術大学の「障害者高等教育研究支援センター」が中心となって行っている「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）」は、他大学における聴覚障害者の高等教育の環境改善に関して中心的な役割を担い、多岐にわたる支援を行っているところです。

一方、宮城教育大学は東北・北海道地区で全障害領域を網羅する特別支援教育教員免許状が取得できる唯一の国立大学として、本学に在学する様々な障害のある学生に対し支援を行ってきた実績をもとに、平成17（2005）年度からは日本学生支援機構の障害学生支援ネットワークの拠点大学として名乗りを上げ、平成19（2007）年度からは「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学生支援GP）に選ばれ、平成21（2009）年度には『しょうがい学生支援室』を設置し、その歩みを確かなものとして参りました。

このような双方の大学の取り組みを活かし、さらなるこの領域における発展を期する願いも込めて、本学と筑波技術大学は平成22（2010）年3月に大学間協定を結び、研究者交流や学生交流を推進するとともに、本学は筑波技術大学で開発された技術を一般の大学に普及・啓発するための実践的な取り組みを先駆的に行っているところです。

この度、「第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」を『杜の都・仙台』で開催するに当たりましては、筑波技術大学からは全面的なご支援をいただくとともに、本学がこれまで取り組んできた障害学生支援の経緯や課題、学生支援GPのこれまでの成果を披歴する場を与えていただいたことに心より感謝を申し上げます。

今回のシンポジウムが、情報が閉ざされることにより高等教育を受ける機会が損なわれていた聴覚に障害のある方々にとっての光明となり、全ての障害のある人々が障害のない人々と共に学ぶ『障害者の権利条約』に記されたインクルーシブな教育の理念を享受できる契機になればこの上ない喜びであり、大変意義深いことであると申せましょう。また今回のシンポジウムが、参加された皆様にとって有意義な一日となり、ともすれば滞りがちであった東北地区の特別支援教育の啓蒙・推進に弾みがつき、明日の特別支援教育の一礎石にならんことを願ってやみません。



プログラム

《第1部》10:00～12:00 分科会

(多目的ホール、セミナールーム 2A、セミナールーム 2B、
セミナールーム 1)

■分科会 1 基礎講座「どうする？どうなる？－受験～入学～授業－」

司 会： 岩田吉生氏（愛知教育大学 教育学部）

話題提供： 北林かや氏（東京大学 バリアフリー支援室）

アドバイザー： 鈴木牧子氏（筑波大学附属聴覚特別支援学校）

橋本一郎氏（東京都立中央ろう学校）

石原保志氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

■分科会 2 「^{しょうがい}詳 解！宮城教育大学－理念から日々の取り組みまで－」

司 会： 萩原彩子氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

講 師： 松崎丈氏（宮城教育大学 特別支援教育講座）

前原明日香氏（宮城教育大学 しょうがい学生支援室）

アシスタント： 立田真由子氏（宮城教育大学 卒業生）

東條桂子氏（宮城教育大学 卒業生）

佐藤晴菜氏（宮城教育大学 特別支援教育教員養成課程）

■分科会 3 「一緒にスキルアップ！

－ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳－」

司 会： 田中啓行氏（早稲田大学 障がい学生支援室）

アドバイザー： 瀬戸今日子氏（名古屋大学 障害学生支援室）

原田美藤氏（愛媛大学 非常勤講師）

岡田孝和氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

能美由希子氏（筑波大学大学院）

吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

棚田茂氏（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園）

■分科会 4 「みんなで解決！現場の悩み－先輩とともに考える－」

司 会： 高橋明美氏（みやぎ DSC）

アドバイザー： 河野恵美氏（立命館大学 障害学生支援室）

管野奈津美氏（筑波大学 卒業生）

福田夕香氏（仙台白百合女子大学 卒業生）

宇治川雄大氏（宮城教育大学大学院 卒業生）

白江香澄氏（札幌学院大学 卒業生）



《ランチセッション》 12:00～14:00 (5階展示スペース)

聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010

聴覚障害学生支援に関する機器展示

東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介

PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介

《第2部》 14:00～17:00 全体会 (多目的ホール)

14:00～14:10 開会式

14:10～15:10 特別企画「徹底解剖!PEPNet-Japan—あなたのギモンに答えます—」

司 会： 菅井裕行氏 (宮城教育大学 特別支援教育講座)

及川麻衣子氏 (宮城教育大学 しょうがい学生支援室)

回 答 者： 高橋信雄氏 (愛媛大学 教育学部)

金澤貴之氏 (群馬大学 教育学部)

吉川あゆみ氏 (関東聴覚障害学生サポートセンター)

白澤麻弓氏 (筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)

15:10～15:20 休憩

15:20～16:20 特別対談「宮城教育大学学長と語る—大学教育と障害学生支援—」

ゲ ス ト： 高橋孝助氏 (宮城教育大学 学長)

藤島省太氏 (宮城教育大学 特別支援教育講座)

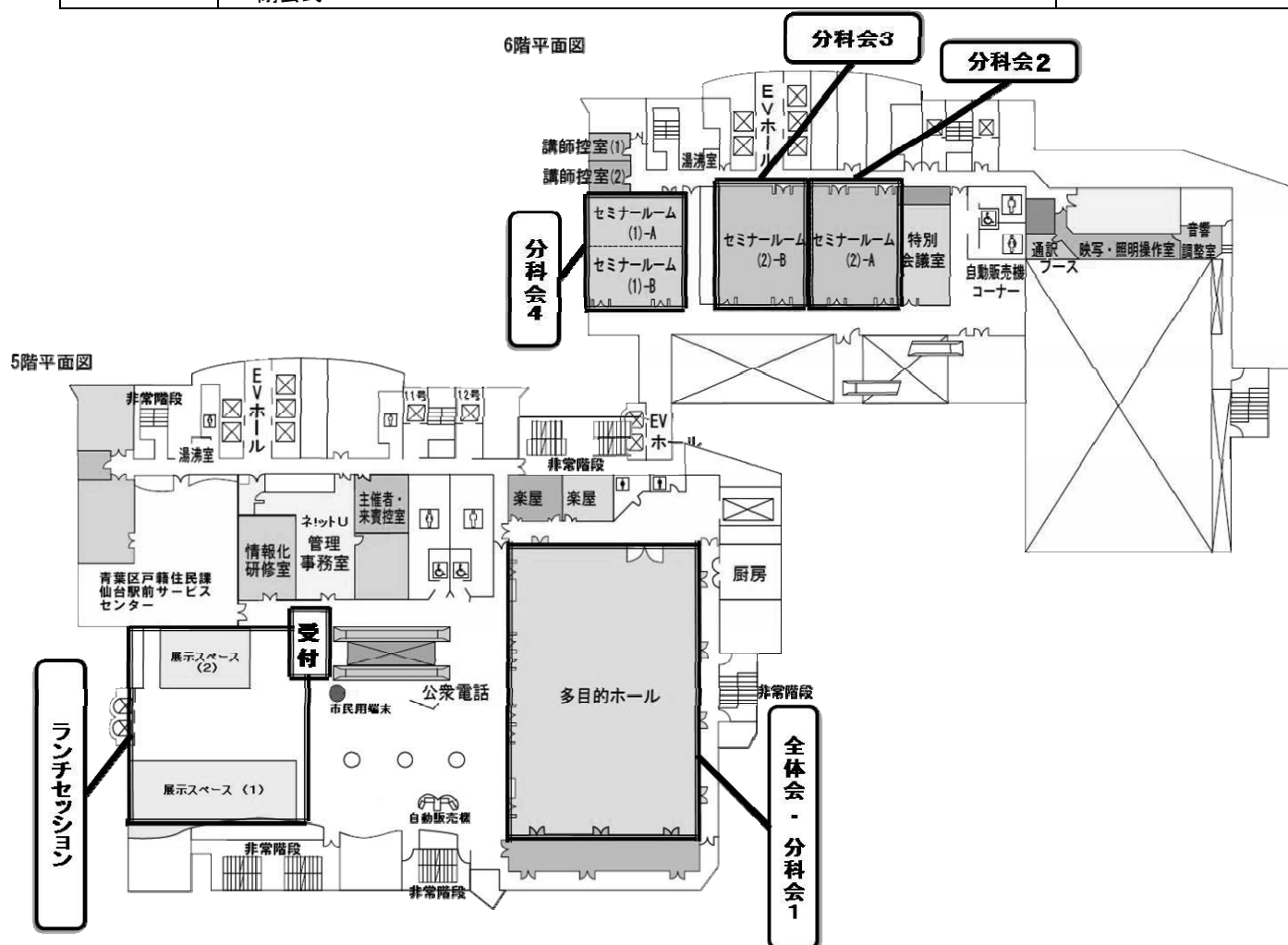
司 会： 中野聡子氏 (東京大学 先端科学技術研究センター)

16:20～16:50 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010 結果発表

16:50～17:00 閉会式

会場案内

時 間	内 容	会 場
10:00~12:00	分科会① 「基礎講座 どうする?どうなる?－受験～入学～授業－」 ②「詳解!宮城教育大学 ー理念から日々の取り組みまでー」 ③「一緒にスキルアップ!ーノートテイク・パソコン・テイク・手話通訳ー」 ④「みんなで解決!現場の悩み ー先輩とともに考えるー」	多目的ホール セミナールーム 2A セミナールーム 2B セミナールーム 1
12:00~14:00	昼食 ※ロビーでのご飲食はできません。また、セミナールーム 2A（分科会 2）会場も別で使用するため、昼食ではご利用いただけませんのでご注意ください。ご昼食には多目的ホール、セミナールーム 1 及び 2B（分科会 1・3・4 会場）をご利用ください。 ランチセッション 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010 聴覚障害学生支援に関する機器展示 PEPNet-Japan 連携大学機関 活動紹介（パネル展示） 東北地区における聴覚障害学生支援 活動紹介（パネル展示）	多目的ホール セミナールーム 1 セミナールーム 2B 5 階展示スペース
14:00~17:00	全体会 特別企画「徹底解剖! PEPNet-Japanーあなたのギモンに答えますー」 特別対談「宮城教育大学学長と語る ー大学教育と障害学生支援ー」 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010 結果発表 閉会式	多目的ホール





分科会



【分科会 1】

基礎講座「どうする？どうなる？-受験～入学～授業-」

司会：岩田吉生氏（愛知教育大学）

話題提供者：北林かや氏（東京大学 バリアフリー支援室）

アドバイザー：鈴木牧子氏（筑波大学附属聴覚特別支援学校）

橋本一郎氏（東京都立中央ろう学校）

石原保志氏（筑波技術大学）

企画趣旨

これから入学する聴覚障害学生を受け入れる大学の教職員、反対に聴覚障害学生を送り出そう学校等の教員を対象にした分科会です。願書の提出や入試など、大学に入学するまでの手続きで起こる問題とこれに対する支援、そして入学した後の情報保障等の状況について、聴覚障害学生支援の全体像を解説します。また支援の現状を踏まえた上で、課題となる問題について参加者の間で共通理解をはかります。この中では、生徒や学生の社会自立に向けたステップとして、教師や支援者は何をどこまで支援したら良いのか、生徒や学生が自分自身で判断し解決しなければならないことは何なのかということを含めて考えます。

前半は、聴覚障害学生支援の基礎知識として、現在、大学で障害学生支援コーディネーターをされている方から、受験や授業など場面ごとの支援の具体とその流れについて、講話形式でお話しいたします。

後半は、Q&A というかたちで、フロアからの質問に対して、アドバイザー（講師）の方からご助言をいただくとともに、参加者同士で情報交換、意見交換を行います。上記の障害学生支援コーディネーターの他、ろう学校で進路指導をするという立場から生徒の大学進学を支援してきた先生方から、事例にもとづいた具体的なお話をいただいた後、参加者の皆様からの質問や意見に対して、回答や助言をいただきます。

なお、参加者のみなさまより事前に質問をいただきました。時間内に回答や助言ができなかった質問につきましては、後日 PEPNet-Japan のホームページにアドバイザーのみなさまからの回答等と併せまして掲載させていただく予定にしております。



「東京大学における聴覚に障害のある学生へのサポート」

東京大学 バリアフリー支援室 北林かや氏

東京大学における 聴覚障害のある学生へのサポート

一受験から入学、支援実施まで一

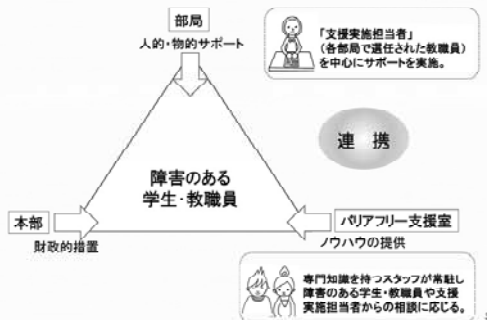
東京大学バリアフリー支援室
北林 かや

目次

1. 東京大学のバリアフリー支援体制
2. 入学前の各種情報提供
3. 事前相談～入学までの流れ
4. サポートの流れ
5. 聴覚障害のある学生へのサポート例
6. 教員・支援実施担当者へのレポート
7. テイカーの養成・研修
8. 意見交換会の開催、学内啓発の推進

2

1. 東京大学のバリアフリー支援体制



3

バリアフリー支援室の役割

- ・ 障害のある学生・教職員のサポートに関するノウハウの提供
- ・ サポートにかかわる関係者間の調整
- ・ バリアフリー支援連絡会議、障害のある学生・教職員との意見交換会、支援実施担当者研修会等の開催
- ・ サポートスタッフ募集・養成講座・スキルアップ研修等の実施
- ・ バリアフリーに関する啓発



(障害のある教職員との意見交換会)

4

2. 入学前の各種情報提供

- ホームページによる情報提供
- オープンキャンパスでのバリアフリー支援室公開
- 各種見学対応
(ホームページ経由で問い合わせ可)



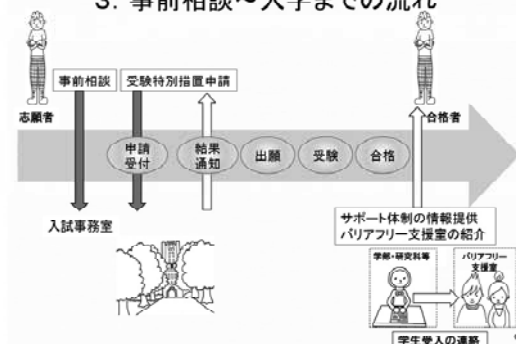
バリアフリー支援室ホームページ
<http://ds.adm.u-tokyo.ac.jp/>



オープンキャンパス支援室公開
(2010年度 駒場支所)

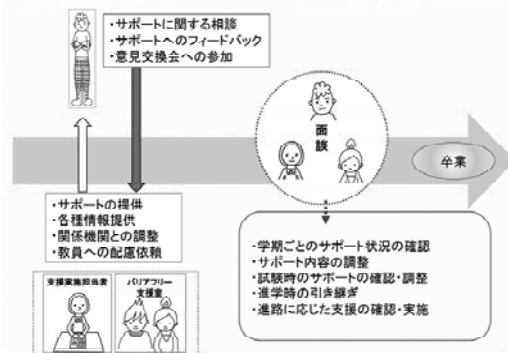
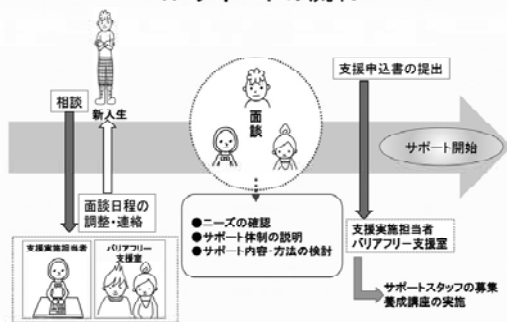
5

3. 事前相談～入学までの流れ



6

4. サポートの流れ



5. 聴覚障害のある学生へのサポート例

【各種相談・情報提供・関係者間の調整】

- サポートに関する相談
- 授業担当教員との連絡・調整、配慮依頼
- 定期試験時に配慮すべき事項の調整
(試験時間の延長や別室受験、注意事項の文書伝達など)
- 支援機器に関する情報提供、支援機器の貸与
- 補聴相談に関する情報提供
(学生からの要望を受け、学内外の補聴相談専門家を紹介)
- 教室での座席位置の確保

【情報保障】

- ノートテイク
- パソコンテイク
- ノート作成
- 手話通訳
- 文字起こし（授業録音／音声教材等）
- 字幕挿入



パソコンテイク
撮影・写真加工

6. 教員・支援実施担当者へのサポート

- 支援実施担当者研修会
: 各部局の支援実施担当者を対象とし、支援体制や、障害のある学生への接し方、サポートの実際について研修を行う(年1回)
- 授業担当教員への説明
: 必要に応じ、聴覚障害学生の受講に際して必要なサポートや、配慮についての説明会を学部で開催する(各学期開始時。個別に対応する場合もあり。)
- 「教員ガイド」のホームページでの公開
: 聴覚障害学生への対応について、広く周知。

7. テイカーの養成・研修

- ノートテイク講座・パソコンテイク講座(各3時間)を学期開始時に複数回実施。
- 個別講座やフォローアップ研修、学生のニーズにあわせた追加講座も随時行う。



パソコンテイク講座



ノートテイク講座



8. 意見交換会の開催、学内啓発の推進

- ・ 障害のある学生との意見交換会(年1回)
- ・ サポートスタッフとの意見交換会(各学期末)
- ・ バリアフリー支援室説明会(各学期開始時)
- ・ 手話でしゃべランチ(月2回)



バリアフリー支援室説明会



手話でしゃべランチ

13

「筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部普通科の大学進学の実状と課題」

筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部 鈴木牧子氏

この10年余りで、本校高等部生徒の大学進学先は少しずつ変化し、様々な学部学科で学ぶ生徒が増えてきた。大学院に進学したり、留学したりする卒業生も出てきている。「障害学生に対する様々な支援制度を活用しながら、大学等の高等教育機関で学ぶ」ということが広がってきた事実に感謝するとともに、その一方で、大学に生徒を入学させるに当たって「ここまでは育てておきたい」という課題も生じてきた。ここでは、本校の進学の実状と、高等部卒業時まで育てたい生徒像について述べたい。

1. 本校高等部普通科の進学の実状（平成21年度）

（1） 高等部普通科卒業生28名の進路

- ① 本校高等部専攻科 5名
- ② 東京都障害者職業能力開発校 1名
- ③ 筑波技術大学産業技術学部産業情報学科 7名
- ④ 一般大学 11名
- ⑤ 未定 4名

（2） 一般大学合格実績（合格者数）

- 【国立】 医学（1名） 障害科学（1名）
- 【私立】 環境科学（1名） 教育（2名） 工学（4名） 芸術（2名）
- 福祉（1名） 文学・社会科学・心理学（9名）
- 法学（1名） 薬学（1名）

2. 卒業時まで身に付けておいてほしい力・姿勢・態度

（1） 学力・学ぶ姿勢に関すること

- ① 各教科の基礎・基本をきちんと身につけている。
- ② 学ぶ楽しさを知っていて、意欲的に学習に取り組める。
- ③ 様々な方法を使って、自分から調べることができる。
- ④ 学ぶ意味や目的を自覚し、学んだことを自分のものにするための努力ができる。
- ⑤ 自分以外の人の考えや意見を聞くことで、自分のものの見方や考え方が深まったり、広がったりするということを経験的に知っている。
- ⑥ 読書の習慣がついている。（本好き）

（2） コミュニケーション・社会性等に関すること

- ① 「人間関係を構築する」ことの重要性和楽しさを知っている。
- ② 日本語（話し言葉・書き言葉）による表現力、理解力が身についている。
- ③ 場面や相手の立場に応じて、いくつかのコミュニケーション手段を工夫して使える。
- ④ 相手の立場や考え方を尊重しながら、自分の状況や気持ちを素直に（率直に）述べるができる。
- ⑤ 周囲の人間と協調・協力しながら、様々な物事を進めたり問題解決したりする。



(3) 聴覚障害・情報保障（情報支援）に関すること

- ① 自分の聴覚障害の状態についてきちんと理解し、周囲に「どのような方法をとれば（どのような支援を受ければ）確実にコミュニケーションをとることができるか」を説明することができる。
- ② 十分な支援制度がない場合でも、地道に理解を求めて活動する気持ち（覚悟）を持っている。
- ③ 支援を受ける立場、支援する立場の両方を尊重する態度が身についている。
（感謝の気持ちを素直に述べられる・自分のできることを積極的に行う）

「受験・授業・入学における東京都立中央ろう学校の取り組み」

東京都立中央ろう学校 特別支援教育コーディネーター 橋本一郎氏

1 はじめに（東京都立中央ろう学校の概要）

本校は、聴覚に障害のある生徒に対し、6年間の中高一貫教育を通して、「大学等への進学に対応できる確かな学力を身につける」ことを教育目標とし、平成18年度に開校した新しいろう学校です。しかし、この「確かな学力」というものを身につけるには、その基盤となる「調和の取れた人間性」が必要不可欠だと考えています。これらに関連付けながら、今回のテーマである、受験・授業・入学における本校の特徴的な取り組みを紹介するとともに、ろう学生の生の声や地域のろう学校が直面している大きな課題を提言することがろう学校の役割と考え発表いたします。

2 授業（基礎学力の充実に向けての取り組み）→ 自己適性の発見・自学自習への意欲

① 「習熟度別学習グループ」の設定

中学部1年生から高等部1年生までは、学力テスト等の客観的な資料に基づき、学習グループを決定する、習熟度別学習グループで学びます。（実技教科等は学級単位での授業です。）高等部2・3年生は、生徒の進路に応じたコース別学習（文系・理科系・総合系）に分かれます。

② 「学びの時間」の設定

朝8時25分から20分間全校生徒が朝学習に取り組んでいます。中学部では国語・数学・英語の学力の定着を、高等部では国語力の伸長を図ることを目標にしています。何よりも大切なことは自学自習の姿勢を身につけることです。

③ 外部テスト・夏期講習・土曜補習（高等部から）・「小論文演習」などの学校設定科目の充実を図るほか、全教室に大型プラズマディスプレイを完備し、見える授業に向けて努力しています。

3 受験（大学進学に向けての取り組み）→ 自己肯定感・他者理解・豊かなコミュニケーション

① 「大学生講演会・交流会」の実施（夏1回・冬1回実施）

多くの大学生に協力してもらい、年齢の近いろう学生から大学生活の実際を知ることを目的としています。夏は主に「学部・学科の紹介」をプレゼンテーションしてもらいます。その後、グループに分かれ「入試方法や受験対策」「大学生生活のいろは」などのテーマを作り、参加生徒たちと自由に話してもらいます。保護者や難聴学級等の教員とも、自由に話し合う機会を作っています。教員には話しにくいような内容も、同じろう学生ということで気軽に相談できます。こういう機会は、私たち教員にとっても、普段の大学生生活を知らないのととても参考になります。（今年度の第一回は23大学から26名の学生が協力してくれました。第二回は12月27日に開催されます。）また、この取り組みは、関東各地のろう学校に連絡するほか、都立高等学校・難聴学級設置校に連絡し、聴覚障害教育のセンター校としての役割を果たしたいと考えて取り組んでいます。

② 「大学進学フェア」（6月頃）および「オープンキャンパス」（夏休み等）への引率・参加

高等部1年生の段階で、大学進学フェアに参加します。ここでの目的は、進学への意欲を高めることですが、同時に積極的に各大学のブースに行き、話している受験生が多くいることを目の当たりにして知ることかもしれません。また、通常開かれるオープンキャンパスも保護者にも声をかけ、見学のポイントや講義参加の方法と一緒に学びます。これは、高等部2年生では、本人と保護者のみで希望の学部のあるオープンキャンパスに参加できるようにするためです。もちろん、高等部3年生になり志望大学が絞られてからは、担任や進路指導部等の教員が引率し、受験時の情報保障等の相談への支援をします。フェアでは、情報保障とは何かを1から説明しなければいけない大学もまだまだ多かったり、オープンキャンパスで情報保障をつけてほしいと依頼をしようと思ったら、入試担当窓口にはファックス番号やメールアドレスが掲載されていないという現実にぶつかることも多々あります。

③ 「大学授業体験」の実施（高等部1年の12月頃・高等部2年の5月頃）

高等部1年生の大学授業体験は、ノートテイク・パソコン要約筆記・手話通訳等の情報保障を受けながら通常の大学の講義に入れていただくものです。もちろん事前に自立活動の授業の中で、情報保障手段やその特徴については考



え話し合いますが、机上の空論になりがちです。この体験の一番の目的は、イメージだけの大学をより具体的にすることです。例えば、情報保障を受けながら90分の講義を集中して受けることがどれくらい大変なのかを感じることで、ここで大切にしたいのは、在籍しているろう学生との懇談を持ち、生の声を聞くことです。大学生生活の楽しさや苦勞を聞き、さらに大学への進学意欲を高めていくことをねらっています。

高等部2年生の大学授業体験で、生徒は昨年よりさらに情報保障について考え行動することができます。ろう学生だけでなく、支援している学生とも懇談する時間を設け、情報保障を支えている人はどんな気持ちなのだろうか、と自分を取り囲む人たちの気持ちに気づくことも大切にしています。また、聞こえないことを受容しきれていない生徒については情報保障を全くつけずに講義に参加させ、どのくらい理解できたかを体験します。そしてこの体験時には、自立活動の一環として、聞こえる大学生の前で、手話を教え、自分自身の生い立ちを話し、聞こえについて話すなど、聴覚障害について知ってもらう機会をいただきます。自立活動の時間に、ろう教育や歴史・手話の成り立ちや法律などを調べ、自分たち自身の手で話ることができるように学習します。発表し終えた彼らのほとんどは、うまく発表できなかった・知っていることを伝えるのは難しいと謙虚な態度になります。この経験が、大学入学後や就職後に周りの人たちに自分のことを伝え、支援してもらいたいことを伝える基礎になります。また、筑波技術大学の協力を得て、毎年先生に本校まで来ていただき体験授業をしていただいております。

④ ろう者の活躍を知る講演会・進路見学・自立活動見学の実施、国際交流・理解教育の充実

本校では、社会で活躍しているさまざまなタイプのろう者の講演会を積極的に行っています。また、見学会では法律事務所や病院の薬剤部、ホテルやIT産業等、直接ろう者が働いている職場を訪ね、さまざまなお話を伺います。また、国際交流等を充実させることにより、豊かなコミュニケーション能力、表現技能・能力の育成にも力を入れています。

4 入学（大学入学決定後・入学後の取り組み）→ 人間関係・情報保障・心理的支援

① 情報保障についての情報提供・養成への支援

入学が決定した後、その大学が初めてろう学生を受け入れる場合は、入学式やオリエンテーションでの情報保障から支援します。そして、講義での情報保障についてもどのような社会資源・人材があるのかを紹介し、他大学の情報も届けます。大人数の大学の先生方の前で、すべて本当の気持ちを伝えることができる生徒はほとんどいません。それらをうまく伝えることができるよう、生徒の障害認識によって、また大学の支援状況に合わせてサポートしていきます。

② 自ら発表する機会を要望する支援

生徒の障害認識の程度によって違ってきますが、入学式後できるだけ早くに全学部や学科の学生たちの前で、最低でもゼミレベルで、自分のことを話し理解してもらう機会をお願いしています。

③ 大学への訪問・心理的な支援

緊張する4月、学生生活に余裕が出て楽になる5・6月、ろう学生は逆に辛くなったり苦しくなることがあります。聴力の低下や試験への焦り・情報保障が確立されていないことや周りの話についていけない不安、同じ聴覚障害学生との人間関係等で、体調不調や通学ができない例があります。大学へ訪問して、卒業生と会ったり話し合います。心理的な支援もとても大切ですので、同じろう学生同士のつながりを持つことができるよう支援します。

5 地域のろう学校が抱える大きな課題

多くの公立のろう学校では、次のような課題があるかと思われます。①教員の異動（専門性の維持・卒業生がろう学校へ戻りにくくなる等）②特別な支援が必要な生徒が潜在している高等学校・私立学校への支援・啓発③小学校・中学校の難聴学級との連携の充実④乳幼児・幼稚部・小学部段階での保護者支援の拡充（肯定的な障害者観）⑤大学とのネットワークの維持（人でつながるため、組織としてのつながりが難しい）⑥ろう・難聴・人工内耳、ろう者の生活・社会についての知識や関心を積極的に持たない教員の増加 これらの面の改善を図りながら、卒業した生徒が生き生きとした大学生活を過ごせるように、今後もろう学校と高等教育機関との連携を図っていききたいと考えています。

【分科会2】

しょうかい 「詳解！宮城教育大学-理念から日々の取り組みまで-」

司 会：萩原彩子氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

講 師：松崎 丈氏（宮城教育大学 特別支援教育講座）

前原明日香氏（宮城教育大学 しょうがい学生支援室）

アシスタント：東條桂子氏（宮城教育大学 卒業生）

立田真由子氏（宮城教育大学 卒業生）

佐藤晴菜氏（宮城教育大学 特別支援教育教員養成課程）

- 討論の柱 ①宮城教育大学の現行の支援体制はどのようにして作られたのか
 ②教員養成大学としての理念・目的に基づいた全学的な障害学生支援とはどのようなものか
 ③学生の主体性を生かした支援活動のポイントは何か

企画趣旨

宮城教育大学といえば、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）連携大学であり、また独立行政法人日本学生支援機構障害学生修学支援ネットワーク拠点校にも指定されるなど、聴覚障害学生支援の先進校として知られているところである。

しかし、かつては、学生同士の個人的なサポート活動だけで行われていた時代が長く続いていた。その後、宮城教育大学の教育理念・目的に基づき、障害学生支援を通して学生の「特別支援教育マインド」を育成するという観点から、平成16年度の「障害学生修学支援プロジェクト」の設置を皮切りに全学的な支援体制への移行が行われ、平成19年度には「障害学生も共に学べる総合的学生支援」として、文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」に採択され、平成21年度に「しょうがい学生支援室」が設置されるなど、著しい進歩を遂げている。その一方で、学生同士の個人的なサポート活動の積み重ねのなかで培われ、受け継がれていた「学生が主体となり、お互いのニーズや困難を確認して協同的に活動する」という精神的土壌も大切に、学生の主体的な活動をコーディネーター・教員が後方支援して情報保障支援活動を展開している。どのようなきっかけで、また、どのような戦略で、ここまで支援体制を作上げたのか。これから体制作りを始めようとしている大学等にとってはおおいに興味があるところであろう。

本分科会では、上記3つの柱に沿って、宮城教育大学における障害学生支援をとことん詳解していく。その内容は、支援体制構築を検討している大学等をはじめ、すでに取り組んでいるところにも参考になることだろう。宮城教育大学含め、どの大学等にも抱える課題はある。今回紹介した事例をきっかけに、各大学の支援体制をより良くするために参加者とともに議論を深められたらと思う。



しょうがい
「詳解！宮城教育大学―理念から日々の取り組みまで―」

宮城教育大学 松崎丈氏／前原明日香氏

しょうがい
詳解！宮城教育大学
―理念から日々の取り組みまで―

宮城教育大学
特別支援教育講座 聴覚・言語障害教育コース
准教授 松崎 丈
しょうがい学生支援室
コーディネーター 前原明日香

しょうがい学生支援の目的

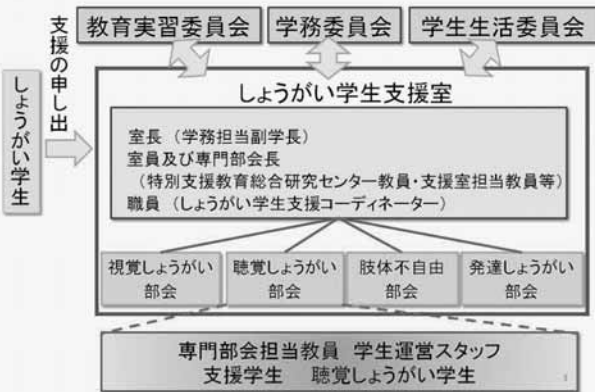
1. 宮城教育大学における理念・目的
 - ・優れた資質・能力を持った教員の養成
 - ・高度の専門性と実践的な教育能力・指導力を持った人材の育成
 - ・広く豊かな教養を身につけ、自然や社会への探究心を育てる人間への深い愛情を核とした職業に対する真摯な態度の育成
2. しょうがい学生支援室の目的(宮城教育大学障害学生支援室規程 第2条)

「本学に在籍、あるいは入学が認められた障害のある学生が、他の学生と等しく教育を受ける権利が保障されるよう、障害学生支援に関する方針の立案及び支援システムを構築するとともに、具体的方策を検討並びに実施する。」



全ての学生に「特別支援教育マインド」を育成

しょうがい学生支援室の体制



しょうがい学生支援室の様子



しょうがい学生支援の内容

	支援内容
聴覚	講義及び教育実習等への支援学生の派遣 ＜手書きノートテイク、パソコンノートテイク 音声認識通訳(遠隔地通訳)＞、手話通訳 FMや赤外線による聴覚補助システム 映像教材字幕作成 複数画像ディスプレイシステム
視覚	点訳ソフトによるテキストの文章の 変換・校正、点字ブロックの設置
肢体	移動等の介助(学生ボランティア担当) スロープエレベーターの設置 駐車場の屋根の取り付け

手書きノートテイク



支援学生92名(年毎に15～40名増加)
支援学生全員に通訳の基本技術として習得させている



複数の画像を調整・提示する ディスプレイシステム



第5回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム(日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク主催)でPEPNet-Japan賞(最優秀賞)を受賞。

FD研修



ノートテイクの
擬似体験

聴覚しょうがい学生による
情報保障の体験談



総合防災訓練



聴覚障害学生支援セミナー



支援室設立までの流れ

平成 7年 聴覚障害学生(松崎)が入学する。個人的支援のみ。
平成11年 聴覚障害学生(松崎)と健聴学生1名が、学生団体
「情報保障の会」を設立する。

当時の活動を経験した卒業生のコメント

「大学は何もしてくれない」という不信感が、「自分たちでなんとかしなければ」という切実な思いを支えていた。

自分たちの意思と責任で活動しているという意識があり、願くもあり、活発だった。学生の主体性が強かった。

学生主体だったので、困難な状況へ解決策がほとんどなかった(限られていた)。規模が小さかったので、お互いの顔がわかり、協力して行うという感じがよかった。

平成16年 聖学校卒業生が推薦入試で合格したことを契機に、言語障害児教育専攻(現:聴覚・言語障害教育コース)担当教員が中心となって、全学的組織「障害学生修学支援プロジェクト」を設置。

情報保障の会から全学的組織への移行を経験した卒業生のコメント

これまで大学や教員は何もしてくれなかったのに、どうして今さら...という思いが拭えなかった。

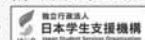
大学が担ったとして、本当に聴覚障害学生支援の運営や活動ができるのか、非常に心配で、先が見えなかった。

これまで情報保障の会で培ってきた財産やノウハウを奪われるのかと危機を抱いた。これまで通り、学生団体として継続したいと思った。

支援室設立までの流れ

平成17年 松崎が本学教員として採用される。
学生主体の活動の拠点やノウハウを生かした体制に構築する。

平成18年 独立行政法人日本学生支援機構「障害学生修学支援ネットワーク」の拠点校となる。



平成19年 本学が「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク」の連携大学として加入する。



学生支援GPIに採択される。

本学在籍中に情報保障支援を経験し、かつ手話通訳の資格を有する卒業生2名をコーディネーターとして雇用。

平成21年 「しょうがい学生支援室」の設置、「支援室規程」の制定。

学生主体の活動について

1. 「情報保障の会」の活動体制の維持

1) しょうがい学生支援の基盤は、「学生主体」であり、「学生同士の係わり合い」にあるという基本理念

2) 学生の手による「運営スタッフ」体制の継続

学生: ①情報保障の実施(NT、PC、音声認識通訳)

②養成研修、広報活動、交流企画の実施

※コーディネーターは適宜助言・意見

コーディネーター: 上記以外の業務

2. 聴覚しょうがい学生に対する教育的支援

19

学生運営スタッフ(平成22年度体制)

1. 総務担当(1名)

- ◇しょうがい学生支援コーディネーターと学生のパイプ役
- ◇運営スタッフ会議の召集・進行
- ◇各担当の仕事の内容・状況把握
- ◇学生運営スタッフのMLの管理
- ◇テイク学生(主に3・4年生)の実習日程の確認

2. 養成担当(3名)

- ◇練習会の企画・運営

3. 反省会担当(2名)

- ◇反省会の企画・運営

4. 広報担当(4名)

- ◇練習会・反省会の議事録作成

- ◇説明会・セミナーのPR

5. 事務担当(3名)

- ◇ロッカー内の事務用品管理

- ◇ミスプリント(テイク用紙にするための裏紙)の回収

コーディネーターは
適宜助言・意見

20

学生主体の活動の様子



反省会(毎月1回)

練習会(月に数回)



学生主体の活動で作られた啓発教材



ボランティア募集パンフレット



情報保障ボランティアCM



教職員のための手引き

21

卒業論文・修士論文のテーマとして
「しょうがい学生支援」の実践的課題に取り組む
卒業・修士論文の一例

1. 文字通訳に関する研究

「効果的な情報の呈示方法について—ノートテイクを中心に—

「聴覚障害学生へのパソコン通訳方法に関する研究

—手書き入力ウィンドウ機能の効果—

2. 手話・手話通訳に関する研究

「日本手話で用いられるうなずきの学習方法に関する研究

—文末と話題化に着目して—

「手話通訳作業における「非手指動作による文法標識の表示」

の使用に関する研究」

3. ディスカッション場面の双方向的対話の保障に関する研究

「聴覚障害学生のニーズに応じた支援

—討論形式の授業でのよりリアルタイムな情報保障—

「聴覚障害学生及び健聴学生のニーズに応じた

討論形式の授業実践に対する支援」

これら研究成果は、本学における支援の質的向上に

貢献し、地域や専門家から高い評価を得ている。

23

聴覚しょうがい部会の集まり





聴覚しょうがい学生に対する教育的支援

聴覚しょうがい学生Aさんとのやりとりや行動観察を通して情報交換し、今後の支援について共通確認する。

1. 変化が見られたこと
例) 周囲に難聴であると言えるようになった。
卒論では、聴覚しょうがい関係で、後に続くしょうがい学生のために役に立つものを研究したいと考えている。
2. つまづいていること
例) 「きこえにくさ」をいかに実感的に説明したらよいか苦悩。
悩みが解決されないと、動揺から相手に対して攻撃的な態度でつきはなすように言ってしまうことがある。
3. 係わりや支援の方針
例) 自分の難聴を他者にどのように説明しているのかを聞く。
相手への心理的ケア(Aさんの気持ちの代弁)も行う。

学生の評価

ーコーディネーターと学生との関係ー

学生のコメント

- 誰に相談すればよいのか相手がはっきりしており、とても助かった。(聴覚しょうがい学生)
- コーディネーターがいるおかげで気軽にボランティアに参加できるようになったからこそ、多くの支援学生を集めることができていた。(支援学生)
- 専門知識のあるコーディネーターが雇用されてからは、困難な状況でも解決しやすくなり、具体的な所で踏み込めるようになったので、会全体の向上につながったと思う。(支援学生)
- 運営スタッフの先輩方がコーディネーターと連携して反省会や練習会を開いている様子を見て、情報保障への関心が高まった。(支援学生)
- ティク以外の事務的なことを色々としてくれるので、ティクに専念できる。(支援学生)
- コーディネーターさんから仕事を頼まれたと嬉しい。(支援学生)
- 学生ティカー同士では言いづらいことを相談できる。(支援学生)
- コーディネーターの雇用で学生が自分の仕事内容をきちんと分担し、集中できるというメリットが増え、学生の負担が減ったと思う。(聴覚しょうがい学生)

学生の評価

ーしょうがい学生支援室についてー

学生のコメント

- 癒しの存在ができて嬉しい。(支援学生)
- 単に情報を提供するといった支援ではなく、聴覚しょうがいのある学生一人一人のニーズに応えようとする活動に向かっている印象を受ける。(支援学生)
- 支援室の取組を具体的に知りたい。支援室での作業の様子でわかることが少し知りたいなと思う。(支援学生)
- アットホームで良い雰囲気がある。(支援学生)
- 保健室のような、ついまたり場になる温かさが支援室にはある。これからはもっとそうあってほしいです。(支援学生)
- 自身の活動の中で何か悩みが出た場合、相談できる環境があったことはとても大きい。(支援学生)
- 支援室内にある防音ブースで、音声認識通訳の練習等を行うことができました。(支援学生)
- 自分のニーズを引き出し、色々な形で実現の仕方を教えてくれる。(聴覚しょうがい学生)
- いつでも支援室に行ける状況がありがたい。(支援学生)
- 支援室にちょっとした話にきいたり飲み会をしたり、コーディネーターさんと学生が仲良く活動できていることを大切にしていきたい。(支援学生)
- アドバイスをもらえる人や時間が増えた。(支援学生)
- 支援室の存在のおかげで大学生活をより豊かに過ごせている。とりわけ人との結びつきを強くしてくれるバリエーションの存在。(聴覚しょうがい学生)

学生のコメント(続き)

- 楽しいからやってくる、やりたいからやってくるという気持ちで参加しているのはいいと思う。(聴覚しょうがい学生)
- 大学教職員を対象にした説明会や広報活動など、大々的な事業も行っているように感じた。(聴覚しょうがい学生)
- 学生団体ではまだ役の負担が大きかったと思う。まため役は誰なのか、はっきりしてなかった。支援室があることで、コーディネーターと相談しながら進めていけるようになったと思う。(聴覚しょうがい学生)
- 以前より養成講座や練習会などの活動が活発になったと思う。(支援学生)
- 通訳者が増え、講義が受けやすくなった。(聴覚しょうがい学生)
- 通訳を受ける立場と運営する立場の二つを経験することで、自分のニーズを具体的に伝える力が育まれたと思う。職場環境を改善するときの大きな支えになっている。(聴覚しょうがい学生)
- 通訳が単に存在するだけでなく、お互いに感謝し合ったり色々なことを学び合ったりすることができるようになったと思う。ただ派遣するだけなら簡単だが、利用者・通訳者ともに育てるという意味で、システムティックにならないことが重要だと強く思う。(支援学生)
- ノートティク以外でも聴覚障害について理解を示し、手助けしてくれる学生がたくさん増えた。(聴覚しょうがい学生)
- 支援学生の募集等が大々的に進められるようになった。活動拠点があることで物品の管理や配布物の印刷なども容易になった。(支援学生)
- 組織化されたことで、実状(派遣状況等)がわかりやすくなり、ノートティクへの参加が容易になってきた。(支援学生)
- 先輩たちほど情報保障に強い思いを持っている。以前の方がみんな(学生)がやっていたという結束感があったのではないだろうか。(支援学生)

支援学生における支援観の変化

ー教育理念「特別支援教育マインド」の育成との関連ー

学生や卒業生のコメント

- 支援を必要としている人たちが感じている困難を具体的に把握することで、自分に何ができるのか、何を学ぶ必要があるのかを具体的に考えるようになった。
- 被通訳者にはめられたり「わかりやすかった」と言われたときに自分の力が活かされていると感じる。
- ボランティアとは何かを定義づけることという一方通行的な考えがなくなった。
- 支援を受ける人との話し合いを重ねることで支援の質を向上させて行きたいと思った。
- 情報を受け取る方がティクを見てメモをとっているのを見て、やってよかったと思う。
- 「してあげる」のではなく「一緒にする」。対象となる人のニーズに合わせて一緒にやってみようというスタンスに変わった。
- 障害者支援＝障害者のためにしてあげるという印象があったが、障害のある方と一緒に困難に向き合うという考え方に変わった。情報保障は、障害のある方だけでなく支援する私たちにもとても良い影響を与えていると思います。
- 通訳を受けている学生が、授業の意見交換に参加したり、積極的に質問したりしているときに「参加できているんだな、よかった」と思った。
- 日頃の生活の中でこの講義の先生は聞きづらいたうな...と聴覚に障害のある学生の立場に立つて考えることも増えた。

今後の支援活動に向けて

学生や卒業生のコメント

- 技術の向上が急速に進んで驚いたが、向上だけに目を向けて、これからの関係性を構築していくことが重要だと強く思う。
- コーディネーターがティカー派遣等を中心に進め、学生が企画や広報の中心となり活動していくという関係性を構築してほしい。全てが組織化してしまえばいいと思う。
- 学生には、これまで学生主体で活動してきたという歴史があったこと、なぜこの支援室が立ち上がったのかというところは語り続けてほしい。
- 支援学生を増やすこと、支援する側・される側の双方の意識や支援の質を落とさないようにすることは、一見相反するかもしれないが、そこが情報保障支援のキーポイントになると感じている。
- 支援体制が確立した今だからこそ、情報が入らない卒業生・聴覚障害学生と支援学生関係なく自分自身が活動の主体であることを、学生自らが考えていかなければならないと思う。
- 人間としての最低限のマナー(出欠の連絡や反省の提出等)は共有してほしい。
- パソコンや音声認識技術は大きい役に立っているが、ノートティクの重要さも忘れてはならないと思う。ノートティクの大切さを、会全体で共有できるようにしてほしい。

まとめ

本学における聴覚しょうがい学生支援の特徴

1. 本学は、しょうがい学生支援について、本学の教育理念につながる重要な取組であると認識し、宮城教育大学の大きな特徴として位置付けている。
2. 聴覚しょうがい部会教員、コーディネーターは、単なる「支援担当者」としてではなく、「学生主体」「学生同士の係わり」を重視する教育的立場で支援することが、しょうがい学生支援の活動の活性化につながると考えている。
3. 聴覚しょうがい部会の学生は、聴覚しょうがい学生支援の活動の主体は自分たちであることを認識し、アットホームな雰囲気得意欲的に活動している。

31



【分科会3】

「一緒にスキルアップ！-ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳-」

司 会：田中啓行氏（早稲田大学 障がい学生支援室）

アドバイザー：

＜ノートテイク＞瀬戸今日子氏（名古屋大学 障害学生支援室）

原田美藤氏（愛媛大学 非常勤講師）

＜パソコンノートテイク＞岡田孝和氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

能美由希子氏（筑波大学大学院）

＜手話通訳＞吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

棚田 茂氏（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園）

- 討論の柱 ①「スキル」とは何か（「うまい」ノートテイク、通訳者は何をしているのか）
②「スキルアップ」のために何が必要か（気を付けるポイント、練習方法）
③「一緒にスキルアップ」するために何が必要か（研修、養成の方法、カリキュラム）

企画趣旨

道具の準備、支援者の養成が比較的容易なノートテイクを中心に、聴覚障害学生に対する情報保障が高等教育機関において整えられ、パソコンノートテイク、手話通訳など、情報保障の手段も多様になっている。

このような流れの中で、入門的な講座、講習会は各高等教育機関で行われるようになり、支援の量的な充実は徐々に進んでいる。一方で、聴覚障害学生は、よりわかりやすく、情報の不足がない情報保障を求め、支援者の側からも、「このままのノートテイクでいいのだろうか」「練習の機会がほしい」という声が聞かれる。しかし、予算、人材等の面から支援者の研修まではなかなかできず、スキルアップについては、サークルなどが独自に行うか、さもないと、支援者個々の努力に任されている所が多いのではないだろうか。

本分科会では、ノートテイク、パソコンノートテイク、手話通訳の実践を通して、「うまい」と言われるノートテイクや通訳者の「スキル」について考え、参加者個々の「スキルアップ」を目指す。同時に、各高等教育機関の中で、支援者同士で「一緒にスキルアップ」していけるようにすることも念頭に置いて議論をしたい。

ノートテイク、手話通訳の実践は、10 分程度の模擬講義を用いて行い、ノートテイクについては、良いモデルとなりそうな参加者を各班 1 名選び、ノートテイクの過程を撮影する。ノートテイクをした紙、ログ、映像、手話通訳の映像をもとに、手段ごとに分かれたグループでディスカッションを行う。他の人のノートテイク、手話通訳を見て、取り入れるべきポイントを考え、情報保障において求められている「スキル」、およびそれを習得するための方法について議論する。ディスカッションを踏まえて、2 回目の模擬講義を行い、「スキルアップ」のポイントを再確認する。最後に、各グループから良いノートテイク、通訳の例を紹介し、全体で共有する。各グループには、情報保障の利用者、あるいは情報保障の担当者の立場から、それぞれの手段について研究をしてきたアドバイザーの方々に加わっていただき、参加者とともに議論をしていただく。

参加者が自分一人で研鑽を積む際、あるいは、所属する機関、団体でノートテイクや手話通訳者の養成、研修に携わる際に活かすことのできる「スキルアップ」の方法を共有することをもって、本分科会の成果とできるようにしたい。

1

【分科会3】

一緒にスキルアップ！

- ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳

2

本分科会の目的

「一緒にスキルアップ」

3

本分科会の目的

スキル

「スキル」とは何か

「うまい」ノートテイクや手話通訳者は
どういふにノートテイク／手話通訳を
しているのか

→ 模擬講義、ディスカッション

4

本分科会の目的

スキルアップ

「スキルアップ」のために何が必要か

どういふポイントを意識したらいいのか

どういふ練習をしたらいいのか

→ 模擬講義、ディスカッション
(1回目 → 2回目)

5

本分科会の目的

一緒にスキルアップ

「一緒にスキルアップ」するために何が必要か

本分科会の参加者が一緒にスキルアップする

自分が所属する団体の他の支援者と一緒に
スキルアップする方法は？

→ 模擬講義、ディスカッション
まとめ（班からの発表）

6

本分科会の流れ

ウォーミングアップ

↓

模擬講義（1回目）

↓

ディスカッション

↓

模擬講義（2回目）

↓

↓

ディスカッション

↓

まとめ



ウォーミングアップ

- まず、短い話をノートテイク／手話通訳
- 方法の確認
- 被撮影者の決定
(ノートテイク、パソコンノートテイク)

模擬講義（1回目）

- 10分程度の模擬講義をノートテイク／手話通訳
- ノートテイク、パソコンノートテイクは全員が行う（そのうち、各班1名を撮影）
- 手話通訳は、半分を撮影する

ディスカッション（1回目）

- 模擬講義のノートテイク／手話通訳を、チェックシートを使ってチェックし、ディスカッションする
- 良いテイク／通訳の映像を見る
- 自分のテイク／通訳の確認
- 他の参加者のテイク／通訳から取り入れるべきところは？

目指すべき「スキル」は？

模擬講義、ディスカッション（2回目）

- 10分程度の模擬講義をノートテイク／手話通訳
- ノートテイクは全員、手話通訳は半分
- 1回目と同様に、テイク／通訳をチェック、ディスカッション
- +
- 1回目で確認したポイントができたか
- できなかったのであれば、どうすればいいか

「スキルアップ」するために必要なことは？

まとめ

- 班ごとに、良い例を紹介しながら、ディスカッションの内容を発表
- 分科会参加者全員で、ディスカッションの内容を共有し、自分のスキルアップや、研修会の企画・運営などに活かす

「一緒にスキルアップ」！！

本分科会の流れ

ウォーミングアップ



模擬講義（1回目）



ディスカッション



模擬講義（2回目）



ディスカッション



まとめ



各教育機関での実践

「スキル」について考える前に.....

- 「情報保障」としてのノートテイク・パソコン
ノートテイク・手話通訳
- ただ情報を増やすことが「スキルアップ」か
- 聴覚障害学生は、ノートテイク、パソコンノート
テイク、手話通訳を通して、授業を受け、主
体的に学んでいく.....
⇒聴覚障害学生がそこから学べるように



手書きノートテイクチェック表

5段階であてはまる評価にマルをつけてください。

			全くできなかった	できなかった	どちらでもない	できた	よくできた
字の大きさ 漢字と平仮名のバランス	1	ちょうど良い大きさに書くことができた。	1	2	3	4	5
	2	特定の平仮名が小さくなることなく、同じ大きさに書くことができた。	1	2	3	4	5
字の読みやすさ	3	くせの少ない読みやすい字で書くことができた。	1	2	3	4	5
	4	適度な字間・行間で書くことができた。	1	2	3	4	5
	5	ほどよく句読点を打つことができた。	1	2	3	4	5
ペンの持ち方	6	字が見えるくらいの位置で軽くペンを持ち、書くことができた。	1	2	3	4	5
姿勢と紙の位置	7	聴覚障害学生から見やすい姿勢、無理のない紙の位置で書くことができた。	1	2	3	4	5
情報提供の仕方	8	文の主題(「何が」)と主題に対する説明の内容(「どうした」)がわかるように書くことができた。	1	2	3	4	5
	9	略字や略語・略号を使うことができた。(普段から略字・略語・略号を使っている場合)	1	2	3	4	5
	10	固有名詞や数字を正確に書くことができた。	1	2	3	4	5
	11	話し手の言葉を使った文章を書くことができた。	1	2	3	4	5
	12	ニュアンスを崩さずに書くことができた。	1	2	3	4	5
	13	大切な情報を書くことができた。	1	2	3	4	5
	14	文を中途半端にせず、完結することができた。	1	2	3	4	5
書き続ける力	15	話に聞き入ることなく、手を止めないで書くことができた。	1	2	3	4	5
	16	漢字で止まらずに書くことができた。	1	2	3	4	5
	17	理解しながら書くことができた。	1	2	3	4	5
教室環境	18	会場内の音情報を書き取ることができた。	1	2	3	4	5

ディスカッション終了後、模擬通訳2で気をつけることを書きましょう。

	19		1	2	3	4	5
--	----	--	---	---	---	---	---

【参考】通常の講義場面の場合はこのようなチェック項目も・・・。

利用者(読み手)	i	聴覚障害学生の状態を見ることができた。	1	2	3	4	5
話し手や教室環境	ii	話し手を見ることができた。	1	2	3	4	5
	iii	板書など色々な情報を確認することができた。	1	2	3	4	5

参考資料提供: 瀬戸今日子氏(名古屋大学)、原田美藤氏(愛媛大学)

パソコンノートテイクチェック表

5段階であてはまる評価にマルをつけてください。

			全 く で き な か つ た	で き な か つ た	ど ち ら で も な い	で き た	よ く で き た
読みやすさ	1	ほどよく句読点を打つことができた。	1	2	3	4	5
	2	適度に改行を入れ、見やすく整形することができた。	1	2	3	4	5
姿勢とパソコンの位置	3	画面を聴覚障害学生が見やすい角度に傾けることができた。	1	2	3	4	5
	4	背筋を伸ばして打つことができた。	1	2	3	4	5
	5	ホームポジションを保って打つことができた。	1	2	3	4	5
情報提供の仕方	6	文の主題(「何が」)と主題に対する説明の内容(「どうした」)がわかるように打つことができた。	1	2	3	4	5
	7	単語登録やFキーメモ(IPtalkの場合)を使うことができた。	1	2	3	4	5
	8	固有名詞や数字を正確に打つことができた。	1	2	3	4	5
	9	漢字の変換ミスが少なく、正確に打つことができた。	1	2	3	4	5
	10	話し手の言葉を使った文章を打つことができた。	1	2	3	4	5
	11	ニュアンスを崩さずに打つことができた。	1	2	3	4	5
	12	大切な情報を打つことができた。	1	2	3	4	5
	13	文を中途半端にせず、完結することができた。	1	2	3	4	5
打ち続ける力	14	手を止めないで打つことができた。	1	2	3	4	5
	15	漢字変換でできるだけ止まらずに、打ち続けることができた。	1	2	3	4	5
	16	理解しながら打つことができた。	1	2	3	4	5
教室環境	17	会場内の音情報を打つことができた。	1	2	3	4	5
連係入力スキル (連係入力の場合のみ)	18	どちらかの入力者に偏ることなく、同じくらいの量を打つことができた。	1	2	3	4	5

ディスカッション終了後、模擬通訳2で気をつけることを書きましょう。

	19		1	2	3	4	5
--	----	--	---	---	---	---	---

【参考】通常の講義場面の場合はこのようなチェック項目も・・・。

読みやすさ	i	聴覚障害学生が読みやすい字の大きさ・配色に設定することができた。	1	2	3	4	5
	ii	聴覚障害学生が読みやすい字間・行間に設定することができた。	1	2	3	4	5
	iii	聴覚障害学生が見やすい画面レイアウトにすることができた。	1	2	3	4	5
利用者(読み手)	iv	利用者の状態を見ることができた。	1	2	3	4	5
話し手や教室環境	v	話し手を見ることができた。	1	2	3	4	5
	vi	板書など色々な情報を確認することができた。	1	2	3	4	5

参考資料：パソコンノートテイク導入支援ガイド やってみよう！パソコンノートテイク(2008)日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク。



手話通訳チェック表

5段階であてはまる評価にマルをつけてください。

通訳技術

			全くできなかった	できなかった	どちらでもない	できた	よくできた
全体像の把握	1	全体的に安心して、長く見ていられる通訳ができた。	1	2	3	4	5
	2	全体的に講義の内容、ストーリー（展開）、ねらいがつかめる通訳ができた。	1	2	3	4	5
	3	話者の雰囲気がよく伝わる通訳ができた。	1	2	3	4	5
見やすさ	4	手話のリズムに違和感がない通訳ができた。	1	2	3	4	5
	5	手話単語や非手指動作の無駄な繰り返しがない通訳ができた。 （“間”に違和感がない通訳ができた。聞き逃しやミスによる無駄な動きがない通訳ができた。）	1	2	3	4	5
	6	日本語の語順にこだわらず、手話として自然な文で通訳ができた。	1	2	3	4	5
	7	表情や手話語彙の動きの強弱によって自然なイントネーションを表現することができた。 （手話単語やNMS〔非手指動作〕に違和感のない通訳ができた。手話を適切な位置と大きさで表現できた。）	1	2	3	4	5

表現技術

CL・空間活用	8	用語や説明の内容を、視覚的にわかるCL構文によって明確化させることができた。 （CLにバリエーションを持たせることができた。視覚的にわかる表現ができた。）	1	2	3	4	5
NMS （非手指動作）	9	適切なNMS（非手指動作：目の開閉、あごの動き、口形など）を使うことができた。	1	2	3	4	5
RS （リファレンシャルシフト）	10	視線の方向などを用いて人物を明確に表すことができた。 （人物の交代の明示することができた。複数の人物を表現し分けることができた。）	1	2	3	4	5

講義に応じた技術（翻訳）

情報量・忠実さ	11	話の概要を理解するのに十分な情報を伝えることができた。	1	2	3	4	5
	12	話の情報量に不足なく、話の細部を伝えることができた。	1	2	3	4	5
	13	伝達されている情報に間違いやズレがない通訳ができた。	1	2	3	4	5
論理や態度の伝達	14	句や文の区切りや接続関係（順接、逆接など）を明確に伝えることができた。	1	2	3	4	5
	15	議論の流れや論理展開（話者の交代、文の主題と主題に対する説明、話の論点や結論）を明確に伝えることができた。	1	2	3	4	5
	16	話されている内容についての話者の態度（推測、断定、使役、可能、受身、義務、要求などとその度合い）を伝えることができた。	1	2	3	4	5
	17	話を聞くことで学問的思考（批判的思考、創造的思考）が喚起される通訳ができた。 （聴覚障害学生が話者の論理を再構築でき、自分なりの意見や疑問をもてるような通訳ができた。）	1	2	3	4	5
語彙選択	18	日本語の概念に忠実な手話単語を選択することができた。 （省略された日本語、指示語を具体的に表現することができた。）	1	2	3	4	5
	19	専門用語の意味がわかるような手話語彙を選択することができた。 （過剰な原語借用をせずに通訳ができた。原語が伝わるように日本語の口形を付けることができた。）	1	2	3	4	5

ディスカッション終了後、模擬通訳2で気をつけることを書きましょう。

	20		1	2	3	4	5
--	----	--	---	---	---	---	---

【参考】通常の講義場面の場合はこのようなチェック項目も・・・。

教室環境	i	板書やスライドの図について説明する時、その図のイメージを生かした手話表現をすることができた。	1	2	3	4	5
	ii	利用者との距離に応じて板書や資料を提示する方法を考え、通訳することができた。	1	2	3	4	5

参考資料：吉川あゆみ他（2010）大学院における手話通訳評価項目の試案作成。日本特殊教育学会第48回大会予稿集，238。

※日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）情報保障評価事業の成果の一部として発表

【分科会4】

「みんなで解決！現場の悩み

ー先輩・コーディネーターとともに考えるー」

司 会：高橋明美氏（みやぎ DSC）

アドバイザー：河野恵美氏（立命館大学 障害学生支援室）

福田タ香氏（仙台白百合女子大学 卒業生（聴覚障害学生））

管野奈津美氏（筑波大学 卒業生（聴覚障害学生））

宇治川雄大氏（宮城教育大学大学院 卒業生（支援学生））

白江香澄氏（札幌学院大学 卒業生（支援学生））

討論の柱 ① 支援現場の悩みをそれぞれの立場から考える。

② よりよい支援に向けた解決策を話し合う。

企画趣旨

独立行政法人日本学生支援機構が2008年に行った調査によると、高等教育機関で学ぶ聴覚・言語障害学生は、1,435名で、聴覚・言語障害学生の在籍校は400校ある。この中で、ノートテイク、手話通訳など授業で支援を行っている学校は290校で、支援を受けている障害学生は902人、聴覚・言語障害学生支援率は62.9%となっている。

このように聴覚障害者が高等教育機関へ進学している実態から、その権利を保障するための情報保障の必要性が認識され、ノートテイクやパソコンテイク、手話通訳、音声認識など情報保障支援を実施する高等教育機関が増えている。

しかし、情報保障支援現場では様々な課題や問題が起きてくる。そのため利用学生、支援学生、支援コーディネーターの意見交換や情報交換、それをもとにした工夫、授業担当教員の積極的な支援、工夫によって、現場の情報保障、ひいては聴覚障害学生の学習環境がより良いものとなる。本分科会では、寄せられた「現場の悩み」について、聴覚障害学生・支援学生・コーディネーターの立場ごとにグループディスカッションを行い、それぞれの立場のアドバイザーからアドバイスをいただき、それぞれに為しえる工夫、なすべき努力について整理する。さらに参加者全員が、悩み解決策を各自の現場で実施できるような討論を行いたい。

【みんなで解決！の流れ】

10:00 主旨説明、講師紹介

10:05 グループ内ウォーミングアップ

10:20 お悩み1提示

グループディスカッション（10分＋まとめ5分）

グループごとの報告（各2分）

全体ディスカッション（10分）

10:50 お悩み2提示

11:20 お悩み3提示

11:50 まとめ



アドバイザー紹介

ふくだ ゆうか
福田夕香氏（仙台白百合女子大学 2007 年度卒業 聴覚障害学生 OB）

高校3年から大学卒業の5年間、週3コマ程、みやぎDSCへノートテイク（講演などは手話通訳）を依頼していました。

学外では、宮城県聴覚障害学生の会運営委員として、ろう学生と健聴学生の交流の機会を提供したり、他団体の行事を通してろう先輩と関わったりしていました。

また、宮城県・仙台市聴覚障害学生情報保障支援センター（現在のみやぎDSC）サブスタッフや、難聴児をもつ親の会やろう児をもつ親の土曜クラブなどのボランティア活動も行っていました。学内では、手話サークルを立ち上げ、聴覚障害者との交流やノートテイクの基礎知識を学ぶ機会を設けて、より多くの学生に理解してもらおうと活動していました。

最低限必要な講義には情報保障がついていたので問題なかったものの、ディスカッション形式はかなり遅れがちで意見を言うタイミングがなかなか掴めなかったこと、それによって、マイナス評価されてしまうのではないかという不安がありました。

悩みを解決しようとする時は、事前に周りと相談して、方法を考えて、やってみる、その後反省兼ねて話し合い、方法を練って次回に活かす。この繰り返しだと思います。

かんの なつみ
管野奈津美氏（筑波大学 2006 年度卒業 聴覚障害学生 OB）

在籍していた4年間、主にノートテイク、パソコン要約筆記、手話通訳の支援を受けました。筑波大学には聴覚障害学生がたくさんおり、聴覚障害学生といっても育った背景が様々でそれぞれ支援に対する考え方や要望が異なるので、自分のニーズをどのように把握して支援学生にどう説明すればいいのか悩みました。聴覚障害学生支援チームの運営委員会に参加するだけではなく、聴覚障害学生同士の意見交換会など積極的に開いたことも自分のニーズを知ることができ、良い経験だったと思います。それから積極的に運営委員会の仕事に関わり、支援学生との交流の一環として手話の講習会を開いたりしました。そういう仕事を支援学生と一緒にしていく中で、自然に交流を深めることができ、何でも話し合える雰囲気を作っていたかなと思います。授業に関しては、私は芸術専攻で実技が多かったので通訳支援をどのように活用していくかも悩みました。試行錯誤を重ねていく中で、色々相談にのってくれていた支援学生や仲の良かったクラスメイトがどう解決しているかと一緒に考えてくれるようになり、芸術の授業に合った支援方法について話し合いました。そして指導教官の協力のもと、芸術専門学群による聴覚障害学生のためのサポートガイドブックを作成することができました。支援に対する知識や経験が豊富な支援学生、現場を知る先生やクラスメイト、支援を受ける聴覚障害学生が一同に話し合える場を積極的に作っていくのも大事ではないかと思います。

しらえかすみ
白江香澄氏（札幌学院大学 2007 年度卒業 支援学生 0B）

はじめまして、札幌学院大学卒業生の白江香澄といいます。
私は札幌学院大学バリアフリー委員会で4年間ノートテイクや手話通訳等の活動をし、現在はその経験を活かして札幌市登録手話通訳者として活動をしています。

大学入学当初はテイカーの人数が足りず、説明会で1度だけテイク体験をした後すぐに実際の講義を担当し、震える手で初めてテイクしたことを覚えています。

3年目で学生副代表を務めた時は、テイカー不足や大学各部署（特に事務関連）との連携、苦情処理で様々な苦勞をしました。会員数が多くなると、なかなか活動に関わることができない会員への対応や、部局長と会員・難聴学生と会員などの人間関係のトラブルもあり大変さを感じました。

それらを解決するにはとても時間がかかりましたが、1番大切にしてきたことは「みんなで話し合うこと」です。月に1回の全体会議や、臨時で開かれる教職員との会議、毎日のように開かれる部局長会議、さらには毎回テーマを変えて開催される「しゃべり場」などなど・・・何もない時でも部室には必ず何人かが集まって話をしていました。「みんなで考えてみんなで意見を出し合う」という文化は今でも後輩たちに受け継がれていますし、だからこそ少しずつでも委員会は成長することができたのではないかと思います。

うじかわゆうだい
宇治川雄大氏（宮城教育大学大学院 2009 年度修了 支援学生 0B）

大学1年生から大学院修了まで6年間、学内の情報保障支援に携わってきました。学生中心で活動していた大学1年生から2年生の頃は、ノートテイクを支援手段として活動してきました。支援体制が大学主体に変わった3年生頃からは、ノートテイクを中心に、パソコンテイク、音声認識なども用いながら、支援を行ってきました。

大学3年生頃までは、週2～3コマ、講義でのノートテイクを行っていました。それに加えて3年生・4年生では、学内の支援グループの運営スタッフとして、主に反省会の取りまとめをしていました。大学院では、主に後輩の相談役のような立場でかかわってきました。

ノートテイクを始めた頃は、なかなか上手に速く書くことができず、悩んだことがありました。また、支援グループの運営スタッフで活動していたときは、新しいメンバーをどうやって集めるかで悩みました。

悩みを解決する時に一番大事なことは、情報保障に携わっている学生同士が、解決の方法を真剣に話し合うことだと思います。その際に、根底にある「情報が得られないことの辛さ」を聴覚障害学生と支援学生が互いに共有しながら、聴覚障害学生と支援学生が対等な立場で意見を出し合うことがとても大事です。



河野恵美氏（立命館大学 障害学生支援室 コーディネーター）

はじめまして、立命館大学 障害学生支援室の河野です。本学支援室で働き始めて3年目です。本学の支援室は、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由の障害がある学生への支援を行っていて、障害学生とサポート学生でサポートごとにチームになっているのが特徴です。普段は聴覚障害以外にもさまざまな学生対応、サポートごとの講座・イベントの運営、教職員の方への障害学生対応に関わる調整等を行っています。

コーディネーター業務の中で特に意識したり、また悩んだりしていることは、支援室でのサポートや活動を通して、障害学生にもサポート学生にも卒業までに大学生活の中でどのようなチカラを身につけてもらえるか、ということです。

障害学生へのサポートでは悩みや課題はつきものですが、たとえ解決できなかったとしても障害学生・サポート学生・職員も含めたチームと一緒に考え知恵を出し合う、ということをお願いしています。

〇〇の立場から

「

悩み事

」

【状況分析】他の人はどう感じている？この悩みが生まれた背景は？

【解決方法】解決方法を、思いつくかぎり挙げてください

【具体的に誰が何をする？】

上に挙げた解決方法を、具体的に実施するにはいつ誰が何をして次に何をしますか？？